

平成 30 年 10 月 14 日現在

機関番号：32716

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02198

研究課題名(和文) 歌劇場における人材育成手法のモデル化

研究課題名(英文) Modeling human resource development methods in opera theaters

研究代表者

鈴木 とも恵 (suzuki, tomoe)

昭和音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：40460266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、欧米の歌劇場における人材育成システムの、育成対象範囲、育成体制、カリキュラム等の育成手法、育成にかかる財政などを明らかにし、そのモデルを導きだすことを目的としている。歌劇場に芸術家等の優れた人材を配置することは、各組織において最も重要な課題である。今回は、社会環境の大きな変化の中にあるイタリア、比較的安定した歌劇場運営が行われているスイス歌劇場での複数の事例を検証し、芸術創造に関わる各人材の育成手法・体制等のモデル化を行う研究を通じ、我が国の人材育成のあり方にも参照可能な汎用性を持たせようとするものである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to derive the models by clarifying the scope of trainees, training systems, methods of training such as curriculum, finance of training, and further related needs of human resource development systems at opera theaters in Europe and the United States. It is vital for every organization to utilize excellent specialized human resources as in the artists of the theater. Here, several cases are examined from opera theaters in Italy which is undergoing major changes in social environment and in Switzerland where theater operations are being conducted with relative stability. Modeling of the individual human resource development methods and systems related to art creation in this study demonstrates versatility applicable to the direction of human resource development in Japan.

研究分野：舞台芸術論

キーワード：オペラ人材育成 オペラ

1. 研究開始当初の背景

1) 本研究に関連する国内の研究動向及び位置づけ

研究者代表と研究分担者が所属する昭和音楽大学オペラ研究所は、国内外のオペラ団体や劇場、音楽堂等と恒常的な情報交換を行いながら、調査活動を続けている。これは1つには、文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業『海外主要オペラ劇場調査、分析比較に基づく、わが国のオペラを主とした劇場・団体の運営と文化・芸術振興施策の在り方の調査研究』(平成13年～平成19年度)において、国内外のオペラ関連の各組織との連携を構築したことによる。同事業では、海外の歌劇場で多様な人材が担う組織運営や人材育成の手法等に関する研究を課題の1つとした。その中で開催した公開講座「海外におけるオペラ歌手養成システムについて」では、アメリカ人でありながら、ドイツの宮廷歌手の称号を得たソプラノ歌手のカラン・アームストロング氏から、オペラ歌手が歌劇場で歌う機会を得るまでの過程を詳述した。(上記2つは一連の講座の一部)これらは講義録を発行して広く一般に公開している。芸術家が歌劇場やオペラ公演に携われるようになるまでの行程は、欧米の歌劇場運営の状況とも密接に関わり、人材が養成される過程もまた例外ではないことが同研究成果から読み取れた。また、同事業では、世界の67か所の歌劇場との連携のもと、歌劇場のセクションごとの人員構成もデータ化するなど、歌劇場運営とその課題が整理できている。また、オペラ研究所が実施した文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『オペラ劇場における人材育成システムに関する研究』(平成21～23年度)は世界歌劇場の人材、あるいは歌劇場で行われている人材育成のシステムに関する調査事業であり、本研究に直接関わる先行研究と言える。研究代表者(同事業・研究員)および研究分担者(同事業・研究総括者)が中心となった同事業では公開講座「ヨーロッパの歌劇場で歌うためには～オーディション、コンクールの実際」で、ドイツ・シュトゥットガルト歌劇場オペラ監督のエヴァ・クライニッツ氏から、若手歌手が歌劇場で歌うまでの準備内容や備えるべき能力等が指摘された。この他にも多くの事例が公開講座や公開研究会などで提示された。この中で研究代表者は『イタリアの歌劇場における人材育成について～ボローニャ劇場を例に』と題する研究会報告等を、研究分担者は、調査報告『海外の劇場組織等における人材育成』等を執筆したことが本研究に繋がった。これらにより、今回対象とするイタリア、スイスの事例が導き出された。

2. 研究の目的

(概要)

本研究は、欧米の歌劇場、音楽祭における人材育成システムの、育成対象範囲(歌手・コレペティトゥア(歌手の芸術向上を担うピアニスト)等の職種、年齢等)育成体制、カリキュラム等の育成手法、育成にかかる財政などを明らかにし、そのモデルを導きだすことを目的としている。歌劇場または音楽祭に芸術家等の優れた人材を配置することは、各組織において最も重要な課題の1つであるが、そうした人材を育成する事業に直接注力することが可能な歌劇場は、その数が限られている。今回は、社会環境の大きな変化の中にあるイタリア、比較的安定した歌劇場運営が行われているスイスの歌劇場での複数の事例を検証し、芸術創造に関わる各人材の育成手法・体制等のモデル化を行う研究を通じ、我が国の人材育成のあり方にも参照可能な汎用性を持たせようとするものである。

1) これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

これまでの調査研究事業で、各国のオペラ上演の専門家から人材育成手法の多様な示唆を受けてきた。しかし、それらの育成手法が一樣でないため、汎用性のある事例を見出せていない。その理由は、各国の歌劇場付属研修所をとりまく環境の相違、すなわち歌劇場、音楽祭の財政状況等(補助金、協賛金、チケット収入ほか)、運営状況(組織体制ほか)等に大きく左右されることにある。しかし、国を(組織体制ほか)等に大きく左右されることにある。しかし、国を特定したうえで歌劇場、音楽祭に焦点を当てれば、取り巻く環境との関連も含め、人材育成手法のモデルを導きだすことが可能ではないかと考えたことが、本研究の端緒となった。

2) 研究成果を発展させた内容：歌劇場が直接運営に関わる歌劇場または音楽祭付属研修所を分析対象とする。多様な芸術創造に関わる人材の育成は、歌劇場、音楽祭組織運営の状況を反映していて、多くの研修所は育成した人材を広く、あるいは自らの劇場もしくは音楽祭に供給する役割を担っている。そうした社会的機能を果たしつつ、取り巻く環境にも大きな影響を受けながら研修所運営が行われている。例えば、ヴァッレ・ディトリア音楽祭、ロドルフォ・チェッレッティアカデミアは音楽監督兼アカデミア学長が著名な指揮者を迎えたことにより、優秀な人材が世界から集まり、ミラノ・スカラ座のアカデミアは今なお重要な人材育成の拠点である。このように、イタリアの歌劇場、音楽祭に世界のオペラ人材育成の役割を担うという社

会的要請があることがわかる。また、スイスのチューリヒ歌劇場のオペラ研修所（国際オペラ・スタジオ）は、歌手、コレペティトゥア等の若手人材を世界中から集めたうえで研修を受けさせて、歌劇場の本公演にも出演させるなどの機会設定を積極的に行い、実績をあげている。これらの人材育成のシステムと手法を詳細に研究することで、人材育成の現場に直接成果の還元が可能な内容となる。こうした手法による歌劇場運営研究は、これまでにない全く新しい発想による研究アプローチだと言える。これらの歌劇場、音楽祭研修所の人材育成システムの整理、歌劇場、音楽祭運営、さらにそれらに影響を与えている社会状況や財政状況などの情報やデータ収集を進める。これらと並行して、2つの国の核歌劇場および音楽祭における人材育成のカリキュラム分析を行い、一定のモデルを導き出す。さらに具体的な視点としては、歌劇場の人材育成や運営そのものに対して、社会的な環境（文化政策等を含む）の変化がどのように影響を及ぼしたのか、特に現在の研修所が歌劇場、音楽祭の公演活動にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

3. 研究の方法 (概要)

これまでにオペラ研究所で蓄積されてきたイタリアの歌劇場、スイスの歌劇場運営に関するデータのとりまとめ。（財政、組織構成、プログラム等、3～5年程度）2. 歌劇場、音楽祭付属研修所に関する調査を開始。（於・国内）3. 海外の研究協力者より、歌劇場付属研修所に関する資料、データ提供を受ける。内容は、人材育成の 対象範囲（歌手・コレペティトゥア・指揮者等、年齢）、 育成体制（講師構成、研修所の運営体制等）、カリキュラム（講座、実践内容、期間、新人公演等の実施内容）、 財政とする。さらに、これまでに修了した人材の活動状況についても把握する。4. 現地でのインタビュー調査を実施。対象は研修所責任者、講師、研修生を想定。5. 具体的な実施内容をモデル化する作業を行い、我が国への活用の可能性をまとめる。なお、これら研究の視点は、7名の研究チームで、研究の進行に伴い常に検討していく。

（初年度）

これまでに公開された、歌劇場運営にかかる調査研究事業『海外主要オペラ劇場の現状調査、比較分析に基づく、わが国のオペラを主とした劇場・団体の運営と文化・芸術振興施策のあり方の調査研究』における調査データ（CD-R と研究報告書、昭和音楽大学オペラ研究所、2006年、2008年）『オペラ劇場に

おける人材育成システムに関する研究』研究報告書（オペラ研究所、2012年）等を参考に、2つの国の歌劇場または音楽祭に関する各種資料を整理して、基礎資料とする。今回、海外の研究協力者との連携による、複数の視点による調査とデータ化を実施することで、モデル化に向けた研究をただちに開始できる。イタリアとスイスの歌劇場または音楽祭に関係する研究協力者と、昭和音楽大学とは極めて密接な関係にあり、研究課題を研究メンバーが共有・認識している。

（初年度以降）

さらにオペラ研究所所属の研究代表者と研究分担者に、各種調査研究事業を通じて課題解決に必要な経験が準備されているため、本研究で取り上げる研究内容と範囲を、極めて具体的で発展性を持つものにできる。

実際には、各歌劇場の人材育成の特徴と成果（評価のあり方も検討）を国内の研究チームで検証し、海外の研究チームと連携しながら、[課題1]および[課題2]について随時進める。[課題1] イタリアのミラノ・スカラ座、ヴァッレ・ディトリア音楽祭、ロドルフォ・チェッレツィアカデミア調査研究する。

スイスのチューリヒ歌劇場の国際オペラ・スタジオを中心に、スイス国内のオペラ・スタジオ全てに関するデータを収集する。これにより、イタリア語圏、ドイツ語圏（スイス）における人材育成手法の対比が可能になる。具体的には、1. 育成対象と範囲（年齢等）2. 育成体制（教員等）3. 育成カリキュラム（内容、時間数、目的等）4. 育成に係る財政の4点を中心に、5. 修了した人材の活動状況も調査する。

[課題2]収集した資料の読み取りとデータ化の準備、開始。

1. データ化の方法決定： データ化の方法を研究チームで検討、決定。

2. データ化の開始： オペラ研究所内で、データ化を開始。

4. 研究成果

本研究は、オペラ制作および歌劇場研究の中で、これまで行われてこなかった人材育成手法のモデル化を中心に、文化政策等社会環境との連関に研究視点を定めた点に特色がある。従前のオペラ研究の成果は歌劇場運営を軸に国内外における芸術文化と社会との接合点を多角的に検証するものだった。これらの研究活動の特徴は、各組織との密接な連携の下に現場密着型の研究活動としており、今回研究代表者と研究分担者はオペラを取り巻く課題への意識が明確で、従来の研究蓄積の活用に加え、劇場資料等を読み込むことに十分な経験をもったメンバーで研究体制を構築することが可能となった。これにより、人材育成、を通じた歌劇場運営、の社会との関係を明らかにする視点が定まった。特に研究代表者が研究対象の歌劇場と密接な協力関係にあったこと、学術

的実績に基づいた研究が可能であったことの2点から、オペラの芸術面に関わる人材育成研究に関して、着実に実績をあげた。上記作業と検証を行うため、研究代表者、研究分担者、および研究協力者との情報交換を実施し（国内）、海外の研究協力者を招聘、公開研究会を実施し、国内の連携研究者と明確になった事実をまとめた。それらを査読付研究紀要に複数もとに、歌劇場における人材育成を総括した。本研究の成果として、これら論文発表を行い、その成果を広く共有した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 鈴木とも恵、石田麻子「イタリアにおける劇場人材の育成と地域経済への貢献の現状：～ロッシェニ・オペラ・フェスティヴァルとアカデミア・ロッシニアーナの検証から～」査読有『音楽芸術運営研究』第 11 号、昭和音楽大学、2017 年、5 - 19 .
2. 鈴木とも恵、石田麻子「イタリアにおける劇場人材育成の現状：ミラノ・スカラ座研修所を例に」査読有『音楽芸術運営研究』第 10 号、昭和音楽大学、2016 年、37 - 48 .
3. 石田麻子、鈴木とも恵、「スイスにおける劇場人材育成の現状：チューリッヒ歌劇場を例に」査読有『音楽芸術運営研究』第 10 号、昭和音楽大学、2016 年、25 - 35 .
4. 鈴木とも恵、石田麻子「イタリアにおける劇場人材育成の現状～マルティーナ・フランカのヴァッレ・ディトリア音楽祭を例に～」査読有『音楽芸術運営研究』第 9 号、昭和音楽大学、2015 年、17 - 29 .
5. 石田麻子、鈴木とも恵、「フランスにおける劇場人材育成の現状～エクサンプロヴァンス音楽祭を例に～」査読有『音楽芸術運営研究』第 9 号、昭和音楽大学、2015 年、7 - 16 .
- 6 .

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木とも恵 (声楽学科、オペラ研究所)

研究者番号：40460266

(2) 研究分担者

石田麻子 (オペラ研究所)

研究者番号：50367398

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

下八川共祐 ((公財) 日本オペラ振興会常務理)

カルメン・サントーロ (スイス・チューリッヒ歌劇場コルペティトゥア)

アルベルト・トゥリオラ (マルティーナ・フランカ・オペラフェスティヴァル芸術監督)

ヴィンチェンツォ・デ・ヴィーヴォ (元ナポリ・サン・カルロ劇場芸術監督)